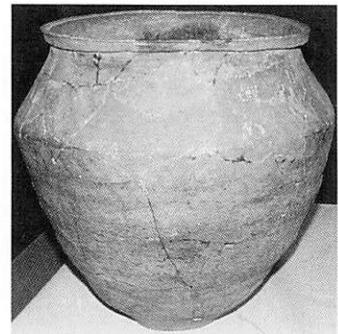


し の り こ せん おお がめ
志 海 苔 古 銭 と 大 甕



昭和43年7月、函館市志海苔町の漁港付近で道路拡幅工事の際、大甕にぎっしり詰められた大量の古銭が発見されました。内訳は、渡来銭や皇朝銭などの孔開銭が374,436枚と、越前および珠洲産の大甕3個です。古銭は判読できたものが94種類あり、上限は前漢代の四銖半兩（前175年初鑄）、下限は明代の洪武通宝（1368年初鑄）で、47,000枚余りの皇宋通宝をはじめとする北宋銭が全体の約9割を占めています。大半がバラ銭の状態でしたが、中には麻紐で孔を繫げた「一緡」のものも含まれています。また大甕のうち2個は、赤褐色で口径60～65cm高さ80～85cm程の福井県の越前古窯産、残り1個は黒灰色の石川県能登半島の珠洲産で、ともに14世紀後半頃に属するものでした。この大甕3個に詰められた備蓄銭は、ほとんど同時期かまたは連続的に埋設されたものとみられ、下限の銭の流通時期や甕の年代から、ほぼ14世紀末頃までのものといえることができます。おそらくは、志海苔沿岸産の昆布を、日本海ルートで京都・大阪方面へ出荷したことによる利益と考えられますが、誰が何の目的で蓄え、かつ埋設したものなのかは明らかにはなっていません。

〈学芸員：田原 良信〉



志海苔古銭の入っていた甕

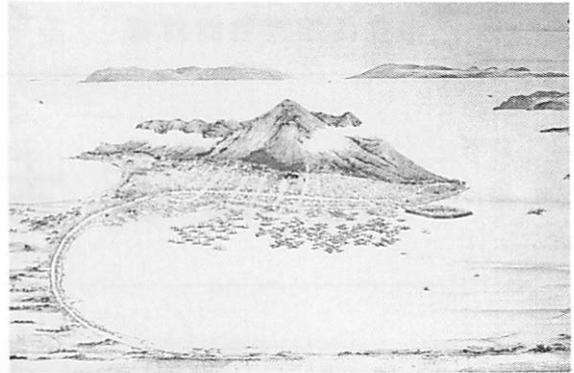
平成4年度特別展 「描かれた箱館・五稜郭」 報告

学芸員 保科 智治

1992年度特別展「描かれた箱館・五稜郭」が6月16日から9月27日までの約3ヶ月間、五稜郭分館を会場として開催され、期間中約53,000人の方々に観覧していただきました。

このたびの特別展は、市制施行70周年を迎えた函館の街がどのように形成され発展したのかを、“みなと”に焦点を当てて考えてみたものです。

特別展では4つのコーナーに分けて展示しました。最初のコーナー「北前船の運んだもの」では、江差町教育委員会のご厚意により、町指定文化財関川家の調度品などを中心に「松前三湊」（松前・江差・箱館）の姿を取り上げました。第2コーナー「五稜郭の築造」では、開港・箱館奉行の再設置・五稜郭の築造といった一連の動きの中で、独特な発展をしていく箱館の姿を、第3コーナー「戊辰戦争と箱館」では、武器・軍艦などを中心に、近世から近代への大きな転機となった戊辰戦争最後の戦地箱館での戦いの様子を紹介しました。第4コーナー「明治の函館」では、東京以北最大の都市を形成していく“ハ



函湾全景 市立函館図書館蔵

イカラなまち函館”の様子を、当時の日本には珍しいカメラなどの資料を中心に紹介しました。

今回の特別展のみで函館の形成・発展の過程をすべて紹介できたとは思いませんが、多少なりとも函館を知ってもらえたのではないかと思います。

平成4年度特別企画展 「箱館開港とペリーの足跡」 報告

学芸係長 岡田 一彦

このたび、函館日米協会再発足1周年を記念し、日本および函館とアメリカの交流の原点が、ペリーの来航とそれに伴う開港であるとして、その足跡を辿りながら、その後の日米関係へもたらした影響を探る特別企画展を開催しました。

開催期間は、平成4年4月26日～6月28日で、会場は函館公園の市立函館博物館本館です。

展示内容は、ビッドルの来航、海防、日米和親条約調印などの資料に始まり、ペリー提督寄贈の洋酒びんと同様のビードロ瓶が出品されて話題を呼びました。また、函館税関資料や、国際都市函館や開港



アマコスト駐日アメリカ大使らによるテープカット



展示された青い目のお人形
知内町郷土資料館蔵

場横浜の異人風俗の様子の判る資料が並べられ、特にペリー来航の様子はいろいろな絵に描かれ、その写しがつぎつぎ作成されています。当時のこの大事件について、大名も庶民もその情報を得ようとしたことが判ります。今回はそれを比較できる同様の構図の図柄も多く展示することができました。

なお、オープンセレモニーには、駐日アメリカ大使アマコスト夫妻が出席され、函館に強い関心を持ったようです。日米友好のため、この開催の結果がその一助になれば幸いです。

平成4年度特別企画展「大むかしの函館」報告

学芸員 田原 良信

ここ数年来、函館および周辺各地において実施された発掘調査によって、先史時代の大規模な生活跡や、膨大な量の土器・石器などの道具類が発見されています。これらの資料については、調査報告書などで公表されていますが、展示により公開されたものが少ない状況にありました。このため、函館および近隣の大むかしの様子を、発見された各種の資料から復元し、調査の成果を紹介する企画展を開催することになりました。開催にあたって、函館市発掘の資料と博物館収蔵品に加え、上磯町・戸井町・南茅部町の各教育委員会からのご協力を得て、数多くの特徴的な資料を借用し、展示を構成しました。展示は、擦文文化を第1層とし、順に続縄文文化、縄文文化晩期～早期、そして第8層の旧石器文化というように、約800年前から12,000年前頃までの時代を溯って、可能な限り多くの資料を紹介することにしました。中でも、戸井貝塚の貝層や南茅部町の縄文文化後期の特異な土器、あるいは函館市内の大集落跡と様々な道具類、函館市で初出の旧石器資料

など、内容的にも豊富なものがあり、各時代の移り変わりといったものを改めて認識できました。ただ、数多くの展示資料のためにかえって煩雑となり、個々の資料の特徴や使われ方などの表現が不十分であったことを反省点に、数年後には新しい資料を加え再び「大むかしの函館」を紹介したいと思います。



貝殻文尖底土器
(中野A遺跡出土)

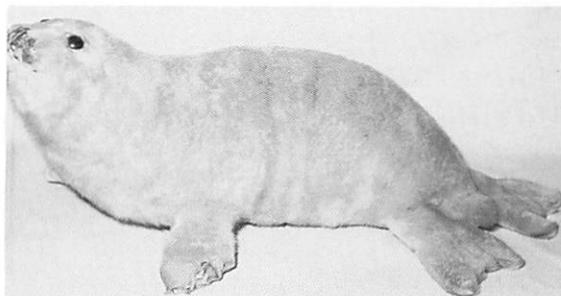
平成4年度企画展「新収蔵資料展」報告

学芸員 尾崎 渉

当館には、さまざまな分野の博物館資料が寄贈され収蔵されています。このほとんどが、函館市民の方々からの寄贈となっており、代々その家に伝わってきた掛軸、家具など寄贈された方にとって、大切にしてきたものばかりです。愛着があり、できれば大切に保存してくれる場所におきたいと考え、博物館に寄贈して下さるのでしょう。

この毎年寄贈された資料を、当館では一同に展示紹介する「新収蔵資料展」を開催しています。今年度は、平成3年度に寄贈された60件の資料を、第1展示室に展示しました。例年に比べ、若干少ない件数ですが、それぞれに貴重なものばかりで、今後の博物館にとって重要な資料となります。

寄贈された資料は、いつも展示しているとは限らず、博物館の展示計画の中で展示されるため、中には新収蔵資料展で展示されただけで、しばらくは展示されない資料もあります。その意味からも、さまざまな分野の資料が一同に展示される、この展覧会は、違ったおもしろさを感じられる良い機会ではないでしょうか。



アザラシの幼獣

今年度は、平成4年9月29日～12月22日まで開催しましたが、期間中、常設展料金で見れる展覧会ということもあって、多くの方々に観覧いただきました。新年度も、開催予定ですので、ぜひとも気軽にお立ち寄りの上、ご覧いただければ幸いです。

平成4年度 教育普及事業報告

今年度の教育普及事業は、例年開催している市民講座、科学教室を、より親しみやすい講座とするため、名称を統一し、「博物館講座」と変更して開催しました。講座数も29講座とし、内容も特別展解説セミナーを加えるなど、より充実したものとしています。とくに、今年度は、要望の高い自然科学分野



博物館講座「自然体験教室」グリーンピア大沼にてキャンプ



博物館講座「自然体験教室」のバードウォッチング

の講座を充実、キャンプしながら総合的な自然体験をする「自然体験教室」を、1泊2日の日程で夏休み期間中に開催し好評を得ました。また、气象台の方に講師をお願いした「気象に見る函館」など、幅広い分野を取り入れた講座を開催したのが特徴となっています。

来年度は、今年度以上に体験講座を広く取り入れた内容とする予定です。ぜひご参加ください。

〈学芸員：尾崎 渉〉

植物資料目録作成準備の整理作業

市立函館博物館には、現在、約11,000点もの植物資料が収蔵されています。これらの資料の整理は、昭和62年（1987）から始められ、平成3年度までに2,400点を終了しました。今年度については、平成4年12月末までに、1,500点が終了しています。植物資料目録は、平成7年度の発行を目標に準備を進めています。

ところで、約11,000点もの植物資料のうち、10,043点に及ぶ資料は、著名な植物学者であった故菅原繁蔵氏が採集したもので、菅原氏の死後、遺族から寄贈された資料です。

氏は、昭和5年（1930）前後から南樺太の植物を採集し始め、昭和15年（1940）～昭和35年（1960）にかけて北海道内の植物を、以後は山形県東根市を中心に、その周辺地域の植物を採集しています。

氏の資料は、菅原コレクションとして、戦前、戦中、戦後の北方の植物を研究する上で欠くことのできない貴重なものであり、各方面から早急な整備が望まれています。

残る資料は、市立函館図書館から保管替えになったものです。この資料は、当該図書館から1932年に刊行された『函館植物志』——大正11年（1922）以

降の函館市を中心とする亀田半島の植物分布についての記載——の基礎になっていることもあり、菅原コレクションに勝るとも劣らない貴重な資料と言えます。

〈学芸員：佐藤 理夫〉



細心の注意が必要な酢葉標本作成作業

研究と資料

当館所蔵のハヤブサ剥製標本について——学芸員 佐藤 理夫

市立函館博物館には、現在、ハヤブサ (*Falcon peregrinus*) の本剥製標本が収蔵庫に保管されています。しかし、この標本は、外部形態から見て、シロハヤブサではないかと思われまますので、ここに報告したいと思います。

当館に所蔵しているハヤブサの外見上の特徴は、全身が白っぽく、頭部にまばらに黒い縦斑があり、背面と翼上面の羽は褐色で、それに白い横縞があるため、遠くから見ると、灰褐色に見えます。下面はわずかに黒色斑があります。これらの理由から、この標本は一見してシロハヤブサの可能性を示唆していました。さらに、外部形態を測定すると、その値は、翼長390mm、尾長235mm、露出嘴峰長25.2mm (全嘴峰長30.7mm)、全長660mmでした (資料に残っている測定値は、翼長410mm、尾長220mm、嘴峰長31.0mm、ふ蹠長37.5mmでした)。

『日本鳥類大図鑑Ⅱ』(清棲幸保 1978 増補改訂版)によると、ハヤブサの測定値は、雄が翼長305-333mm、尾長136-152mm、露出嘴峰長20-21mm、ふ蹠長37.5mmであり、雌は翼長348-378mm、尾長136-181mm、嘴峰長22.5-26mm、ふ蹠長52-57mmとなっています。全長については、『日本産鳥類図鑑』(高野伸二 1981)を参考にすると、雌雄を含めて380-510mmです。

私が実測した値は、生存時の値と異なっていると思います (実際、記載された測定値とは多少異なっています)。しかし、この点を割り引いても、ハヤブサの測定値よりは大きすぎます。この値の大きさのため、当時は「雌(?)」と記載したようです。ただ、仮にこの標本が雌だとしても、既に参考のために挙げたハヤブサの各部位の測定値よりは大きいことが分かります。

では、この標本がシロハヤブサだとしたらどうでしょう。再度、『日本鳥類大図鑑Ⅱ』と『日本産鳥類図鑑』を参考にすると、この鳥の各部位の測定値は、雄で、翼長360-405mm、尾長190-255mm、露出嘴峰長23-25mm、ふ蹠長60-71mmとなり、雌で、翼長400-425mm、尾長230-255mm、露出嘴峰長25-28mm、ふ蹠長66-77mmとなっています。全長については、560-610mmでした。

以上の測定値によると、当館所蔵のハヤブサの測定値が、シロハヤブサの雄の測定値に当てはまるのが分かります。つまり、外見上の特徴から考えても、シロハヤブサの雄と考えた方が良さそうです。

また、シロハヤブサは、外見上の特徴から、背面

が灰青褐色で、下面が灰黒褐色の暗色型、背面が灰青褐色で、下面が白くまばらに黒い縦斑のある中間型、全身の黒斑がわずかで白く見える淡色型の3つに分けられています。このうち、当館の標本に当てはまるのは、淡色型に近い中間型のようです。

シロハヤブサは、ワシタカ目 (*Falconiformes*) ハヤブサ科 (*Falconidae*) の中で最大の鳥です。この鳥は、春季~夏季にかけて、北極圏、つまり、北極海に面するツンドラ地帯やその周辺の森林地帯の北部で繁殖しますが、冬季になると南下してより暖かい地方で越冬します。

北海道ではここ数年、観察例が報告されています。最近でも、平成5年1月19日のNHKのニュースの中で、中間型と淡色型の2羽のシロハヤブサが、北海道渡島支庁管内の砂原町砂崎海岸に飛来していることを報告していました。さらに、翌日の北海道新聞の夕刊にも、この2羽が寄り添った姿を後ろから撮った写真が掲載されていました。この海岸では、過去2、3年続けて、中間型の1羽が姿を見せていたことが報告されています。

当館所蔵の剥製標本は、昭和30年(1955)7月1日に、市立函館図書館から保管替えになったもので、当館発行の蔵品目録にも記載されています。この標本がどのような経過をたどって当該図書館に寄贈されたのか、また、当博物館に保管替えになったのかは、分からないままになっているのが現状です。



シロハヤブサ剥製標本

博物館実習生の受け入れ

今年度も、将来博物館学芸員を目指した博物館実習生を11名受け入れました。この大部分は、北海道教育大学函館分校の学生さんたちです。

当館では、3週間の期間中、学芸員となった場合に実際に役立つ知識を得られるよう、自然科学・考古・歴史・美術の専門分野および展示・保存・教育普及などの機能分野を加えて、幅広くかつ最新にわたった実習内容を組みました。

さらに、今回は当館学芸員のほか各分野の専門家を講師として招き、内容をより充実したものと努めました。



梱包実習を行う実習生の方々

今後とも博物館学芸員養成のため、できる限りの協力をしたいと考えております。

〈学芸係長：岡田 一彦〉

平成4年度新収蔵資料紹介

当館では、今年度12月31日までに下記の方々よりご寄贈いただいた資料、購入資料をあわせ、33件の資料が新たに加わりました。来年度もさらに各分野の資料を収集しますので、よろしくお願ひします。

○寄贈資料

- アザラシ幼獣 1件
【松田 大作氏寄贈・函館市湯川町2-38-4】
- 日本人形 他 3件(3点)
【佐藤 和夫氏寄贈・函館市時任町22-13】
- ヒゲクジラ類のヒゲの切片 1件
【佐藤 智雄氏寄贈・函館市戸倉町5-7】
- 鯨類胎児(液漬) 1件
【亀井 寅吉氏寄贈・函館市石川町1-2】
- ガラス写真 他 2件(2点)
【斉藤 敬二郎氏寄贈・函館市弁天町15-10】
- 船簞笥 他 4件(5点)
【小坂 満氏寄贈・函館市谷地頭町35-13】
- 二重マントの襟 1件
【金子 一郎氏寄贈・函館市大森町24-10】
- 樺太景観絵はがき 他 5件(5点)
【黒滝 泰行氏寄贈・函館市元町22-13】
- タラバガニ 1件
【佐藤 実氏寄贈・函館市弁天町22-18】
- トビ 1件
【星野 公司氏寄贈・函館市栄町12-18】
- 雪下駄(津軽塗り) 1件
【加藤 京子氏寄贈・函館市五稜郭町12-8】
- ミシシッピーワニ 他 5件(6点)
【竹田 脩氏寄贈・函館市大町2-3】
- 船簞笥 1件
【保管替え・市立函館図書館】

- オオタカ 1件

【播摩 登貴江氏寄贈・函館市杉並町16-15】

○購入資料

- 箱館真景図 1件
- 函館市街全図 1件
- 異国人来朝之記 1件
- 船旗図 1件
- 海陸里程新案北海道全図 1件

新旧職員の紹介欄



保科智治(ほしなともはる)

歴史・美術担当学芸員。
佐藤智雄学芸員の後任として五稜郭分館に勤務しています。1年程過ぎ、ようやく慣れてきたこの頃です。

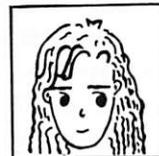


田島明子(たしまあきこ)

臨時職員として1年間本館の受付を担当しました。2度目の勤務です。いろいろとお世話になりました。

山本のぶ子(やまもとのぶこ)

郷土資料館受付を1年間担当しました。どうもありがとうございました。新しい方もよろしくお願ひします。



Hakodate City Museum News

SARANIP —サラニップ— No.32 1993. 3. 15発行
編集・発行 市立函館博物館 (TEL0138-23-5480)
北海道函館市青柳町17-1・函館公園内 (〒040)